

(医見箱)

人工知能

人工知能の進歩は目覚ましく碁、将棋、チェスなどの対戦で人間に勝利したことがニュース等で話題となっています。最近、東京大学への合格を目指す人工知能の「東（とう）ロボくん」が今年挑戦した大学入試センター試験の結果、東大合格レベルに達しなかったことが国立情報学研究所から発表されました。科目別には世界史 B、物理が好成績で、英語（リスニング）と国語（現代文＋古文）の成績は悪かったとのこと。これをみると人工知能は記憶することは優れていますがパターン化されていないことへの対応は苦手のように思われます。医療の分野でも超高齢化社会における総合診療を支援するため、患者の診療、ヘルスケア情報と医師の総合診療の経験知を統合した双方向対話型の人工知能診療支援システム「ホワイトジャック」が自治医大を中心に開発されています。このシステムは総合診療医を対象にしており総合診療が行われている臨床推論を応用することで多くの病名の中から最初の主訴によって 30 疾患程度に絞り経験の浅い医師に対しても確立の高い疾患を抽出・提示し複数の疾患が疑われる場合も見落としがないようにリストアップできるとのことです。さらに、最初の予診情報に加え、診察した医師が身体所見や検査結果を追加入力すると再解析を行いより精度の高い病名を提示し、また、処方支援も行ってくれるようです。このことは「ホワイトジャック」を医療現場で有効に利用し精度の高い病名や処方支援を得るためには患者を診察する医師が正確な検査結果や身体所見の詳細なデータを入力することが不可欠であることを示しています。特に身体所見から得られる情報は診断には欠かせないものですが、医療機器の発達により最近では医師が身体所見を以前ほど丁寧にとらなくなったように思います。人工知能が近い将来一般に医療の場にも導入されることが想定されますが、有効に活用するためには診療の原点に立ち返り正確で詳細なデータを入力できる診療能力を高めていくことが重要と考えます。（大串文隆）